

2020年1月5日

福音書からのメッセージ

家に入ってみると、幼子は母マリアと共に
おられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、
宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り
物として献げた。

(マタイによる福音書2章11節)

本日の福音書の箇所ですが、小さいときに聖書のお話を聞いたことがある方、クリスマスの降誕劇などを見たことがある方にとっては、なじみのあるものかもしれません。12月25日に、わたしたちはイエス様のご降誕をお迎えました。そのあとにお正月もあったので、遠い昔のことのように思う方もおられるかもしれません。しかしクリスマスは、顕現日と呼ばれる1月6日まで続いています。欧米などではこの時期も、まだクリスマスツリーなどのクリスマス飾りはそのままつけられています。それは決して片付け忘れたわけではなく、1月6日までのクリスマス期間はしっかりとお祝いする、そういうことなのです。

では1月6日の顕現日はどういう日なのでしょう。それは星に導かれて、占星術の学者がイエス様の元に来て、黄金、乳香、没薬というささげものをした日です。降誕劇では三人の博士として登場することが多く、彼らはまるで王様のような恰好をして、立派な箱に入った贈り物をささげます。この場面を見たときに、遠い世界の出来事だと思ってしまうのは、わたしだけではないと思います。

というのも、わたしたちはそのような宝物、黄金や乳香や没薬を持っているかというと、そうではないからです。ではわたしたちはイエス様に、何もおささげすることができないのでしょうか。それよりもイエス様は、わたしたちからそのようなものをもらいたいと思っているのでしょうか。

幼稚園の子どもたちのページェント(降



誕劇)の中にも、三人の博士は登場します。一人ひとり、こがね、あぶら、くすりをイエス様にささげます。その後に、全員でこんな歌を歌います。

「わたしもぼくもイエスさまに おささげします このころ♪」。

博士さんたちのように、立派な贈り物がなくても、一人一人の優しい気持ちや感謝の心をイエス様におささげするわけです。

わたしたちは神さまからたくさんのお恵みをいただいています。命も、愛も、お恵みも、あふれるほどに、もったいないほどに、いただいています。でも何もお返しするものがないと思っ

ていません。そんなことはありません。わたしたちが周りの人を思いやる

とき、隣にいる人を大切に思うときに、その心がイエス様に対する大きな贈り物になるのです。その大切な贈り物を、イエス様は心の底から待っておられるのです。

わたしたち一人一人がこのように思いで人と接することができたら、世界は変わっていくのではないのでしょうか。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

Tel/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>